

1956年生まれのバイクライフ自分史 1

一台のバイクが人生を豊かにしてくれた

黒木 侯次

まえがき

午前5時、黄色ボディのiPhone5cのアラームで目覚める。365日、毎日5時起きだ。必ず夜は11時には寝るので、睡眠時間はたっぷり6時間。

今日は日曜日。午前9時半帰還必須ではあるが、250ccのバイクでのプチツーリングの日。枕元には、小型のツーリングバッグとシルバーカラーのジェット型ヘルメットとグローブ。カーテンレールには、昨夜、黒の革パンとお気に入りの黄色の革ジャンをクロゼットからチョイスしてかけてある。肩から袖口にかけて2本の黒のストライプが入ったSchottのクラシックレーサーという革ジャンだ。61歳というのにまるで小学生の遠足の前日のように、寝る時からプチツーリングは始まる。

布団のぬくもりから飛び出して、手短に洗面を済ませる。股上の浅いパツツンパツツンの革パンを履く。ベルトをキュッと締めると、これからバイクに乗るぞという戦闘準備が完了。革ジャンに袖を通し、グローブを中に入れたヘルメットとツーリングバッグを持って、まだ明けやらぬ外へ飛び出した。

日曜日の朝はいつもこんな調子である。

ウィークデーも同じく5時起きで、会社には5時45分には出社している。2008年（平成20年）に親父から小さな鉄工所を引き継ぎ、総勢10人で、観覧車やジェットコースター、バイキング等の遊園地の乗物を専門に作っている。小人数なのでオールマイティの仕事が要求される会社である。経営者とは名ばかりで、材料の発注や図面仕事等々で日々追い回される。

そんな中、息抜きをする手段はバイク。会社の倉庫には、若い頃から集めてきたモンキーという名の小さなバイクが10台並んでいる。お昼休みは、日替り

で、モンキーとお散歩。バイクには高校1年生から乗り始めて、いろんな車種を乗り継いだ。高校2年生の時に、文化祭をさぼってテニス部の仲間と2泊3日でツーリングしたのを皮切りに、大学4年生の時には、夏休み2ヶ月間で日本一周完走。自分にとってバイクは何かと問われると「青春」といつも答える。

最近、日曜日にバイクに乗るために仕事をしている感じ。週の中頃になると、日曜日の天気気が気になる。今週は、どこへ行こうかとプランを立てる。夏の暑い日も冬の零下になる日も、雨や家の用事がない限りプチツーリングにでかける。日頃のストレスをバイクに癒やしてもらおうためかもしれない。

永年バイクと共に生きてきたので、バイクライフやバイクの魅力を本に書きたいと常々思ってきた。やりたいことリストのひとつに「本を出版する」と手帳にも書いていた。2016年（平成28年）1月に、ギャラクシーブックスさんから、「本を書きませんか」と突然メールが届いた。あまりにタイムリーな話なので、新手の詐欺かもしれないと思ったが、どんな内容なのかとメールを返してみた。メールをやりとりするうちに、人生の節目の還暦を迎える年にこんなチャンスが舞い込み、これを逃がしたら二度とやってこないと思った。いつか書きたいと思っていたのは、今なのだと思った。担当のAさんにお逢いして、サポートをお願いすることに決めた。自分とバイクの関わりを書きながら、自分の生き方や小さな夢を実現してきたことなどをこの本で紹介できればと思っている。

2017年8月 黒木侯次